

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No.138 August 2014

研究の最前線

◆ 2014 年度夏期国際シンポジウム「危機の 30 年」開催される ◆

センターは2014年7月10～11日に、夏期国際シンポジウム「危機の30年：第一次～第二次世界大戦期ユーラシアにおける帝国・暴力・イデオロギー」を開催しました（科研費基盤研究A「比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究」との共催）。ロシア・ウクライナ紛争や中国の台頭で世界秩序が流動化する中、今年が開戦100周年に当たる第一次世界大戦を再考する動きが世界的に広がっていますが、このシンポジウムでは第一次世界大戦を単独でとらえるのではなく、直前のバルカン戦争から戦間期のさまざまな危機、そして第二次世界大戦までを視野に入れました。特に戦争・暴力と帝国・植民地の交差に注目し、諸帝国間の境界地域が戦争の中で持った重要性、この30年間における帝国主義の揺らぎ・変容・再活性化がもたらした暴力や新しい植民地政策、帝国主義と反植民地主義の間で生まれたさまざまな思想を論じました（プログラムは前号参照）。



第1セッションの報告者たち



第4セッションでの議論のようす

スラブ・ユーラシア研究センターへの改称後最初の国際シンポジウムにふさわしく、ロシア・ソ連を中心としながらも、東は日本、朝鮮、ベトナムから、西はオスマン帝国、バルカン、ドイツに至るユーラシア諸地域の歴史を縦横に議論する場となり、大変刺激的な思考材料を得られる2日間でした。大型プロジェクト期間中のシンポジウムに比べ外国人ゲストの数を絞り込み（しかも予定していた報告者のうち、アレクサンダー・プルーシン氏が事情により来日できなくなったのは残念でした）、宣伝も控えめにしましたが、それでも98名の参加者を迎え、議論も盛り上がりました。パネリストおよび関係者の皆様に御礼申し上げます（特に、数人の報告者のために質疑応答を通訳して下さった池直美さんに）。[宇山]

◆ 2014年度科学研究費プロジェクト ◆

2014年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです（8月12日現在）。[事務係]

基盤研究 (A)

- 宇山 智彦 比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究（2013-17年度）
岩下 明裕 ボーダースタディーズによる国際関係研究の再構築（2014-17年度）

基盤研究 (B)

- 家田 修 大規模環境汚染事故による地域の崩壊と復興：チェルノブイル、アイカ、フクシマ（2012-15年度）
越野 剛 社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究—旧ソ連・中国・ベトナム（2013-16年度）
野町 素己 東欧革命以降のスラヴ世界におけるマイクロ文語の総合的研究（2013-16年度）
原 暉之 サハリン（樺太）島における戦争と境界変動の現代史（2013-16年度）

基盤研究 (C)

- 高本 康子 近代日本の画像メディアにおける「喇嘛教」表象の研究（2012-16年度）
長縄 宣博 軍事と外交から見るソ連の帝国建設：カリム・ハキモフ（1892-1937）の研究（2013-16年度）
後藤 正憲 ポスト社会主義国における経営主体のアントレプレナーシップに関する文化人類学的研究（2014-2016）
井濶 裕 帝国日本における「北進論」の特質と影響：樺太と千島を例に（2014-16年度）

挑戦的萌芽研究

- 越野 剛 ロシア語文化圏の東西周縁の文学における戦争の語りの比較研究（2012-14年度）

若手研究 (A)

- 高橋美野梨 自治と気候変動—デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」と「対内的自治」（2014-17年度）

若手研究 (B)

- 前田 しほ 20世紀後半ロシア文化における戦争の記憶表象についてのジェンダー研究（2012-14年度 2014.7.1付で他研究機関に転出）
佐藤 圭史 ソ連邦末期における民族的資源動員の中範囲理論（2013-14年度）
地田 徹朗 戦後ソ連のアラル海流域環境史—人間活動と生態危機（2013-16年度）
本田 晃子 ソヴィエト建築の全体主義化においてマスメディアが果たした役割の研究（2014-17年度）

研究活動スタート支援

- 金山 浩司 一五年戦争期日本における科学論・技術論の展開（2013-14年度）

学振特別研究員奨励費

中山 大将 日本帝国崩壊後の樺太植民地社会の変容解体過程の研究 (2012-14 年度)
高橋美野梨 境界研究から見る「北極」- デンマークの北極圏戦略と媒介項としてのグリーンランド (2012-14 年度)
フィオードロワ・「戦後」の東アジアにおけるリアリズム映画の比較研究 (2014-16 年度)
アナスタシア

◆ 北大祭期間中のセンター 一般公開に 315 名来場 ◆

昨年度に引き続き、北大祭の期間中の6月7～8日にセンター一般公開を開催しました。このうち、6月7日は、北海道大学の理系の4研究所（電子科学研究所、低温科学研究所、遺伝子病制御研究所、創成研究機構）と共に、5研究所・センター合同一般公開として実施しました。合同一般公開では、小中学生を主なターゲットとした景品付きシールラリーがおこなわれました。最終的に、2日間合わせて昨年度の入場者数の1.5倍の315人の来場者があり、展示やシールラ



絵本・アニメコーナーは特に大盛況でした

リーの他にサイエンストークもおこなわれた7日午後は特に盛況でした。

本年度、センターは助教4名体制を敷いており、一般公開では、後藤・高橋・森下・地田の各助教がスラブ・ユーラシア地域に関連するテーマを1つずつ選んで展示を一からつくるという新たな試みをおこないました。展示レイアウトと展示パネルのデザイン・作成は、昨年度末までグローバルCOEプロジェクトにて博物館展示を担当していた宇佐見祥子・研究支援推進員が担当しました。各助教が担当した展示タイトルは以下のとおりです。

- ・後藤 正憲「モスクワからソチへ ロシア2度目のオリンピック」
- ・高橋沙奈美「こどものためのロシア・東欧文学」
- ・森下 嘉之「スラブ・ユーラシアの世界遺産」
- ・地田 徹朗「写真で観るウクライナ危機」

中でも、ロシア・東欧の絵本の展示とアニメ上映は、大人はもちろんのこと、シールラリーの景品目当てでやって来たはずの小中学生も足を止めるなど大好評でした。絵本もアニメも椅子に座ってゆっくりみていただくという工夫を凝らしました。

ウクライナ危機展示では、日本で数少ない現代ウクライナ情勢の専門家である藤森信吉・センター共同研究員に、藤森氏自身が本年2月の政権崩壊直後にキエフ中心部で撮影した貴重な写真を提供していただきました。

6月7日には以下の2名の講師によるサイエンストークもおこないました。

- ・家田 修「チェルノブイリのいま、そして未来へ」
- ・井上 紘一（本学名誉教授）「ポーランドとアイヌ」

特に、センターOBの井上紘一先生による、サハリンでの文化人類学研究の先駆者であるポーランド人のプロニスワフ・ピウスツキについてのご講演は、非常に貴重な機会だったと



井上統一先生ご講演のようす

いうだけでなく、来場者とのインタラクティブな対話形式でおこなわれたまさに「トーク」であり、その講演術も学ぶところ多でした。

今回のセンター一般公開では、前回と異なり、サイエンストークを大会議室ではなく、展示をおこなったセンター4階ラウンジの余りのスペースを活用しておこなうという形式をとりました。大型書店でおこなわれているブックトークをイメージしての試みでしたが、展示と講演の空間的な一体性の演出には成功したと考えています。子

供を含む一般向けのキャッチーな展示とスラブ・ユーラシア地域の最新情勢や研究成果を分かりやすく紹介する展示、そして、教員によるインタラクティブなサイエンストークという構成でのセンター一般公開を来年度以降も継続できればと思います。資金もマンパワーも理系研究所には遠く及びませんが、手作り感あふれる、しかし、スラブ・ユーラシア地域に興味をもってもらえる、そんな機会になったと自負しております。土日にもかかわらずセンターに足をお運びいただいた皆様、会場準備・運営にご助力いただいたセンタースタッフ・院生の皆様に感謝申し上げます。

最後に、パネルの一部は9月末までセンター4Fラウンジにそのまま展示してあります。センターニュースをお読みの皆さまも、センターに來所する折がございましたら、一度、ぜひ展示をご覧になっていただければと思います。[地田]

◆ 2014年度鈴木・中村基金奨励研究員決まる ◆

2014年度鈴木・中村基金奨励研究員は以下の4名の方に決定しました(滞在日程順)。[望月]

採用決定者・所属	テーマ	予定滞在期間	ホスト教員
長沼 秀幸 東京大学大学院	ロシア帝国の現地権力機関によるカザフ草原統治：18世紀後半から19世紀前半を中心に	2014年 7月1～16日	宇山
金沢 友緒 東京大学大学院	18世紀後半から19世紀前半ロシアの新聞・雑誌にみるドイツ文学の影響	2014年 7月14～26日	越野
大谷 崇 早稲田大学大学院	シオランやエリアーデ等に深甚な影響を与えた哲学者ナエ・イオネスクの言説を、特に政治への発展に留意し、他の右翼思想家と比較しつつ解明する	2014年 8月4～19日	家田
梶山 祐治 ロシア国立人文大学大学院	アレクセイ・ゲルマンの映画における文学的コンテクストと視覚的モチーフ	2015年 2月1～21日	越野

◆ ソウル大学キム教授の滞在 ◆

ソウル大学経済学部のカム (Byung-Yeon, Kim) 教授が7月4日から8月1日までセンターに滞在されました。同氏は、ロシア、東ヨーロッパをはじめとする移行経済や北朝鮮経済を専門とし、これらの分野において韓国の研究を主導するだけでなく、世界的にも優れた研究成果を発表されてきました。今回は、北朝鮮経済に関する本を準備することを主たる目的としてセンターに来られました。カム教授のおかげで、滞在中に、“Economic Development of Regional Powers in Eurasia: Dialog between Researchers of Russia and India”、“Analysis on Socialist and Post-Socialist Economies: Dialog between Japanese and Korean Researchers”と題する2つのセミナーを開くことができました。後者のセミナーでは、“The North Korean Economy: Current Evaluation and Future Integration”という報告がなされ、久保庭真彰氏（一橋大）や中村靖氏（横浜国立大）らとともに活発な討論をおこなうことができました（前者のセミナーについては、本号の佐藤隆広氏によるエッセイ参照）。[田畑]

◆ ブリヤート大学ボトーエフ准教授の滞在 ◆

2014年8月3日から2015年6月2日まで、日本学術振興会の招へい研究員としてブリヤート国立大学東洋学部准教授のイーゴリ・ボトーエフ (Igor Botoev) 氏がセンターに滞在します。ボトーエフさんの専門は日本語・言語学・日露翻訳研究です。今回の滞在での研究テーマは「ロシア戦争文学の翻訳における日露戦争の記憶：社会学的視点から」です。[越野]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース137号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。ただし、今号で独立して紹介したものは省略します。[大須賀]

- 5月13日 杉山杏奈（中央ヨーロッパ大、ハンガリー）「完全なる出版の自由を、検閲つきで：後期社会主義期における中欧演劇ネットワークと『諸国民の春』」（ユーラシア表象研究会）
- 5月15日 ニーデルハウゼン博士著『総覧 東欧ロシア史学史』（北海道大学出版会、2013年）輪読会 第二回：第一章「ポーランドの歴史叙述（後半）」（中・東欧研究会）
- 5月27日 南東欧の諸問題：ハンガリーの視点から Pap, Norbert（ペーチ大、ハンガリー）“Muslims in Hungary”; Sokcsevits, Dénes（同）“Croats in Hungary”; Reményi, Péter（同）“Integration and Disintegration in Kosovo”; Bíró, László, “Yugoslav Integration and Macedonia (1918-1939)”; Kitanics, Máté, “The Slavs in Hungary from the 15th Century to the 18th Century”（中・東欧研究会）
- 5月31日 中村知子（茨城キリスト教大）「モンゴルの牧畜における災害対策の通時的変容」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 6月5日 高橋沙奈美（センター）「ふるさとを遠く離れて：ラトヴィア東部のロシア語話者のアイデンティティと記憶」；森下嘉之（センター）「歴史としての社会主義団地：1989年プラハ『南町』をめぐる試論」（北海道スラブ研究会）
- 6月18日 ポーランド大使公開講演会 Cyryl Kozaczewski（駐日ポーランド大使）“Geopolitical Significance of Poland”（センター特別講演会）
- 6月21日 一緒に考えましょう講座 湊源道（ルーツ・オブ・ジャパン代表）「原発事故からの広域避難者：現状とニーズ」
- 6月23日 伊東孝之（早稲田大）「政治変動と国際環境：ポーランド（1943-48年）とウクライナ（2013-14年）」（北海道スラブ研究会）
- 6月24日 伊東孝之（早稲田大）「協定による民主化の栄光と悲惨：ポーランド（1980-89年）とウクライナ（2004-2014年）」（中・東欧研究会）
- 6月27日 第9回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 山村理人（センター）「ウクライナの農業問題：ソ連崩壊後の構造変動と『新興農業大国』としての発展」

- 7月 3日 Anastasiia Fedorova (センター)「日ソ初の合作映画『大東京』(1933):その製作と公開を巡って」(ユーラシア表象研究会)
- 7月 6日 スラブ・ユーラシア研究センター共同研究報告会 内田健介 (早稲田大)「スラブ・ユーラシア地域における東洋伝統演劇の受容と表象に関する研究」; 鳥山祐介 (千葉大)「近現代ロシア文化史における祖国戦争」
- 7月 7日 北ユーラシア研究会セミナー「北極圏における国際共同研究」 Vasily Bogoiavlenskii (ロシア科学アカデミー)、Vladimir Pavlenko (同)、Alexander Georgiadi (同)
- 7月 8日 等々力政彦 (トゥバ民族音楽家)「南シベリア9地域における、先住民言語による地名のデータ化」(客員研究員セミナー)
- 7月 13-14日 The 10th Japanese-Thai Research Seminar at SRC in Sapporo Pasuk Phongpaichit (チュラーロンコーン大、タイ)“Inequality in Thailand and Japan”; 伊藤延由 (飯館村いいたてファーム)“Radio Contamination of Wild Plants in Iitate Village”; 家田修 (センター)“Catastrophe Management or Civil Protection: Case Studies in Japan from a Comparative Perspective”; Sirinud Kucharoenphaibul (北大)“Student Movement in Thailand in 1970s: Event Analysis Approach”; Choosit Choochat (チェンマイラチャバット大、タイ)“Tourism and Sufficiency Economy: Alternative for Peasant Society”; 落合研一 (北大)“The Nibutani Dam Case on the Ainu people’s Right to Enjoy Their Own Culture and Its Impact”; Teerapol Kulprangthong (北大)“Thai Theravada Buddhism and Social Capital in Germany”; Christopher Baker (フリー研究者)“Ayutthaya as an Urban Society”; Plubplung Kongchana (シーナカリンウィロート大、タイ)“Phrik (Chili): A Fragment of Ayutthaya History”; Pornsan Watanangura (チュラーロンコーン大、タイ)“Orient in Occident: On the Reception of Buddhism in Europe with Special Reference to German Literature and Music in the Early Modern Age”; 岩本由輝 (東北学院大)“Japan Earthquake as History”; 鈴木健夫 (早稲田大)“From Siberia to Harbin, China: Escape of the Russian Germans against Stalinism”
- 7月 14日 長沼秀幸 (東京大・院)「19世紀前半ロシア帝国におけるカザフ草原の役割: V. A. ペロフスキーによるオレンブルク統治の考察を中心に」(鈴川・中村奨励研究員研究報告会)
- 7月 15日 藤森信吉 (センター共同研究員)「ウクライナ大統領選挙とその後の情勢を考える」(北海道スラブ研究会)
- 7月 17日 一緒に考えましょう講座 伊藤延由 (飯館村いいたてファーム)「飯館村のいま」
- 7月 23日 金沢友緒 (東京大・院)「O. II. コゾダヴレフとその文学活動: エカチェリーナ時代のドイツ留学をとおして」(鈴川・中村奨励研究員研究報告会)
- 7月 26日 東洋文庫現代イスラーム研究班 札幌セミナー 宇山智彦 (センター)「ウクライナ紛争からロシア政治と旧ソ連諸国国際関係を読む: ポピュリスト権威主義の軍事化、ナショナリズムと地域統合のディレンマ」; 今井宏平 (日本学術振興会)「公正発展党外交のアナトミー: 『ダーヴートオール・ドクトリン』の変容と『ウクライナの政変』への対応を中心に」
Analysis on Socialist and Post-Socialist Economies: Dialog between Japanese and Korean Researchers Kim Byung-Yeon (ソウル大、韓国)“The Future Transition and Integration of the North Korean Economy”; 久保庭真彰 (一橋大)“Abnormal Statistics in the U.S.S.R. and Russia’s Inheritance”; 中村靖 (横浜国立大)“Special Trade Earnings, Money Supply, and State Budget of the U.S.S.R.”; 田畑伸一郎 (センター)“Some Observations on Prices in Russia” (センターセミナー)
- 7月 29日 藤原文「カナダ政府とウクライナ系カナダ人の Euromaidan への対応」(昼食懇談会)
- 7月 30日 Umur Korkut (グラスゴー・カレドニアン大、英国)“Turkey as a Regional Power and Her Role in the Middle East and Slavic Eurasia” (中・東欧研究会)
- 7月 31日 小野瑞絵 (北大・院)「チェチェン・ナショナリズムから汎コーカサス・ジハード運動へ: イデオロギー移行はいつ、どのように起こったのか」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 8月 5日 原貴美恵 (ウォータールー大、カナダ)「北極温暖化と東アジア」(UBRJ セミナー)

特別セミナー「ユーラシア地域大国の経済発展： ロシア研究者とインド研究者の対話」を開催して

佐藤隆広（神戸大学／スラブ・ユーラシア研究センター客員教授）

はじめまして、今年度、スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）の客員教授として着任しました佐藤隆広です。わたしの本務校は神戸大学で、専門分野は開発経済学と現代インド経済論です。神戸大学では附置研究所である経済経営研究所（RIEB）に所属しており、今回、同じく附置研究所であるSRCに滞在できるのを大変光栄に思っております。わたしとSRCとの関わりは、田畑伸一郎教授を研究代表とする新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」が開始された2008年度にまで遡ります。5年間にわたって実施された新学術領域研究では、わたしは第3班（経済）に所属し、ロシア・中国・インド三カ国の「労働市場」と「製造業の生産性」に関する比較研究をいたしました。この間、何度か、SRCで開催された研究会やシンポジウムなどに参加しております。

かねてから、避暑をかねて、夏季シーズンに北海道大学で研究する機会が持てないだろうかと夢想しておりましたが、今回、2014年7月17日から8月11日までSRCにおきまして共同研究に従事することができ、大変嬉しく思っております。わたしのSRCでの研究テーマは、「中国とロシアとの比較におけるインド中央地方関係と地方分権化」となっております。客員教授の任期は2015年3月31日までとなっており、2015年1月末にはもう一度、SRCを訪問し「中国とロシアとの比較におけるインド中央地方関係と地方分権化」のテーマで研究報告をしたいと思っております。いまSRCにおきまして、それに向けて主として文献調査と統計データ調査を行っています。

さて、わたしは田畑教授と共同で、SRC訪問直後に、下記のようなセミナーを開催しました。

スラブ・ユーラシア研究センター特別セミナー

「ユーラシア地域大国の経済発展：ロシア研究者とインド研究者の対話」
（科研費基盤研究（B）「インドの産業発展と日系企業」との共催）

日時：2014年7月19日（土）10～18時15分

場所：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター大会議室（4階403号室）

第I部（英語）

10:00-11:30 Kim Byung-Yeon (Seoul National University), "Comparison of Determinants of Firm Performance in China and Eastern Europe"

11:45-12:45 Shinichiro Tabata (SRC), "Comparative Analysis of Inflation in Russia"

14:00-15:00 Srabani Roy Choudhury (Jawaharlal Nehru University/ Kobe University), "Indian Consumer Profile: Business Opportunities for Japan"

15:00-16:00 Takahiro Sato (Kobe University/ SRC Visiting Professor), "Greasing the Wheels? The Effect of Corruption in Regulated Manufacturing Sectors of India"

第II部（日本語）

16:15-17:15 石上悦朗（福岡大学）「インド産業発展における地域、企業・企業家および労働市場：これまでの調査と今後の調査・研究課題に関連して」

17:15-18:15 絵所秀紀（法政大学）「ティルプール・ニットウエアクラスターの形成と展開」

セミナーへの参加者総数は20数名、内訳をみますと、大学院生を除くとロシア経済研究者が7名、インド経済研究者8名です。上記報告者の所属大学と北海道大学以外からは、農林



Kim 教授（右）、田畑教授（左）

国と比較すると中国における資源配分の歪みがより深刻であることを明らかにしました。わたしは、生産性で計測した中国の企業パフォーマンスが良いにもかかわらず、その投資配分には大きな歪みが存在していることを明らかにした Kim 教授の研究は、資産価格バブルが崩壊しつつある中国経済の将来を展望するうえで極めて示唆的であると感じました。Kim 教授の研究報告は、計量経済分析を駆使した良質の研究報告だったと思います。

第2報告の田畑 SRC 教授は、ロシア・中国・インドのインフレ率の動向を確認したあと、ロシアにおけるインフレーションの決定要因を資源エネルギー価格の動向から浮き彫りにしました。とりわけ、わたしにとって、ロシアにおける天然ガスの生産者価格・購入者価格・輸出価格のグラフは興味深いものでした。近年の1000立方メートルあたりの輸出価格が350ドル、購入者価格が130ドル、生産者価格がわずか50ドル、と各種価格に大きな乖離が存在しています。これは、資源エネルギー価格はどうやらロシアでは市場メカニズムだけで決定されているわけではないことを示唆するものです。市場メカニズムのみならず政府介入も決定的に重要であると思われる天然ガス・石油・電力などの資源エネルギー価格に注目して、今後、ロシア・中国・インドの三方国のインフレーションの比較が実現されれば、大変興味深い比較研究になると、わたしは感じました。

第3報告の Srabani Roy Choudhury ジャワハルラー・ネルー大学准教授は、インド新中間層の現況を概観したあと、裕福なインド人家計（毎月の家計所得が日本円で50万円以上）の102人のアンケート調査回答にもとづき、彼・彼女たちの旅行に対する意識調査の結果を報告しました。報告で言及されている日本政府の統計によれば、観光目的によるインド人の年間訪日数はわずか7万人程度に過ぎません（しかもこの数値のなかには商用目的の短期滞在も含んでいるようです。ちなみに中国人は100万人以上）。実際、今回のアンケート調査からも、インド富裕層の日本に対する認知度は極めて低水準であることがわかりました。たとえば、東京・広島・長崎の地名を知っているのはほぼ100%でしたが、神戸で41%、京都で57%、札幌で12%、大阪ですら84%程度の認知度でしかありません。Roy Choudhury 准教授のアンケート調査は2014年5月からSNSを通じて実験的に開始したばかり



Roy Choudhury 准教授

水産省・一橋大学・埼玉学園大学・旭川大学・ロシア NIS 経済研究所・慶応大学・茨城大学・広島大学などから研究者が集まり、多様な顔ぶれとなりました。

第1報告の Kim Byung-Yeon ソウル国立大学教授は、中国と中東欧諸国の企業パフォーマンスの違いを企業個票データを利用して分析した研究を報告しました。この報告では、第一に中国の「新規参入した民間企業」(de novo private firm) のパフォーマンスが群を抜いて良好なこと、第二に中東欧諸

インド研究者チーム（セミナー翌日の7月20日撮影）



左から、三嶋恒平（慶応大学）、宇根義巳（広島大学）、長田華子（茨城大学）、絵所秀紀（法政大学）、石上悦朗（福岡大学）、佐藤隆広（神戸大学 / SRC 客員教授）、Srabani Roy Choudhury（JNU/ RIEB 外国人研究員）、上池あつ子（大阪教育大学非常勤）（敬称略）

りのもので、まだ十分にアンケート結果の分析を行う物理的な時間が確保できなかったようです。わたしは、今後、Roy Choudhury 准教授によるこの調査をインテンシブに利用したもうすこし深い分析を期待したいです。

第4報告は、わたしと加藤篤史・青山学院大学教授との共同研究にもとづくものです。これは、規制が強いビジネス環境のもとでは、腐敗や汚職がビジネス活動の潤滑油の役割を果たすという Greasing the Wheels 仮説をインド製造業のセミマクロパネルデータを利用して分析したものです。実際、実証分析の結果、規制産業においては、腐敗が労働生産性や資本労働比率を改善することが明らかになりました。

以上、第1報告から第4報告までは英語のセッションでした。つぎの第5報告と第6報告は日本語のセッションとなります。

第5報告の石上悦朗・福岡大学教授は、インドの産業発展について、具体的にどのような企業家がどういった地域でビジネス活動を行っているのかを地図・現地調査で撮影された写真・企業家のプロフィールなどの解説を通じて分かりやすく解説しました。とくに、パンジャブ州の小規模零細の鉄鋼業の事例は、企業家が職人カースト（ランガリアン）・商業カースト（マルワリ、パンジャブのパニア）などのコミュニティ出身であり、労働や資金調達の面でもコミュニティの役割が甚大であることを示唆する点で興味深いものだったと思います。「顔の見える」産業発展論で、ロシア経済研究者からの評判も良かったと思います。石上教授は2014年9月から1年間、「インド在来型工業都市のビジネスネットワーク」という研究テーマで、インドでの在外研究を予定しており、わたしはその研究成果が今から大変楽しみです。

第6報告の絵所秀紀・法政大学教授は、インドのタミルナード州ティルプールに存在しているアパレル（とりわけニット）産業の最大の集積地の歴史的形成と現状を多数の二次・三次文献調査をもとに解明したものでした。邦語文献においても、ティルプールのアパレル産業については複数の研究がありますが、絵所教授が試みたような包括的な既存研究文献調査はいままで存在しませんでした。第5報告の石上教授の「顔の見える」アプローチに加えて歴史的アプローチによって、インド産業に切り込んだ質の高い研究報告だったと思います。とくに、若手研究者たちにとっては、絵所教授の丹念な文献調査は今後の研究活動にとって大きな刺激を与えたと思います。絵所教授においても、同地域の企業家輩出の背景にインドの特定コミュニティである商業カースト集団（マルワリや南のチェティア）や農業カースト（ガウンダー）などが存在することが指摘されています。

以上、セミナーでは合計6本もの研究報告があり、その後には活発な質疑応答もありました。セミナー終了後は、場所をサッポロビール園に移動し、ロシア研究者7名とインド研究者8名の合計15名がビールとジンギスカンを堪能しながらセミナーでは十分成し得なかった深く熱い対話を実現しました。

学 界 短 信

第6回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスに参加して

森下 嘉之（センター）



韓国外語大学校・オバマホール

筆者は2014年6月27-28日に韓国・ソウルで開催された「第6回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンス」に、報告者の一人として参加した。同コンファレンスは毎年、東アジア諸国で開催されている大会であり、スラ研からも多くの報告者が参加されている。筆者は、2012年9月にインド・コルカタで開催された第4回大会に続き、2度目の参加である。今年のテーマは「東アジアの平和構築とユーラシア協力の拡張：ダイナミックスとタスク」という形で基調講演が行われたほか、2日間にわたって6つのセッションに29のパネルが設けられた。昨今のウクライナ情勢を反映して、在韓ウクライナ大使館による報告が設定され、多くの聴衆を引き付けていた。

今年の大会は、3月に申し込みが締め切られ、6月末の大会に向けて準備をする運びとなったが、6月という学期の只中にペーパーを用意するのはかなりの難儀であり、締め切り前

までに相応の構想準備を整えておく必要があると感じた。また、大会の詳細（アクセプトの可否、宿情報など）に関する連絡が先方より届くのが遅く、用意されたプログラムに発表者の欠落があるなど、やきもきした部分もあった。しかし、いったん大会が始まれば、ホストやスタッフの方からも懇切丁寧に対応していただき、プログラムも過不足なく進行した。前回は、コルカタという場所柄もあり、ホテルから会場、レセプションに至るまで「完全護衛」の中で行われたことに衝撃を受けたが、今回は札幌から直行便もある大都市ということで、宿手配や交通に関しては特に問題なく確保でき、大会が終われば街中を歩きまわることもできた。少人数のパネル数が多いこともあるが、今回は時間進行に非常に余裕があり（昼食1時間半、休憩各30分）、会場を走り回る必要もなくワンフロアで見ることができたのは有難かった。



筆者とフロアの様子



2日目のレセプション

このコンファレンスでは、地元韓国の参加者を中心に、中央アジア諸国、ロシア、中国、日本からの参加者が多数を占めた一方、欧米からはドイツ、イタリア、ハンガリーなど数名の参加者にとどまった。今回の大会で、前回に比して大きな違いを感じたこととしては、ロシア語での報告が多かったことである。基調講演がロシア語で行われたのをはじめ、ディスカッションの途中でも、旧ソ連諸国の方が聴衆として参加しているパネルでは、いつの間にかロシア語のディスカッションに切り替

わっていたものがあった。そういう意味では、これだけの規模でありながら、欧米基準ではない「ユーラシア」のコンファレンスであることを強く実感した反面、言語的にある種の居づらさも感じた。今回のコンファレンスはソウルの韓国外語大学校・オバマホールで開催されたが、こうした「ユーラシア」な学会が米大統領の名を冠した会場で開催されるのは、何か不思議な因縁である。

さて、筆者が今大会で報告した内容は、「The Social History in Czech Socialistic Housing Complex」と題し、社会主義時代プラハの巨大住宅団地の社会史を扱うものであった。具体的には、「プラハの春」挫折後の1970-80年代にチェコで進展した巨大な社会主義団地に着目することで、社会主義末期から体制転換に至る団地住民と当局の關係に新たな視点を加えることを目的とした。チェコに限らず、社会主義国では全国各地に巨大なモノトーンの住宅団地が建設され、今でも都市景観の基本構造を形作っていることは、旧社会主義圏で過ごされた経験のある方にはお分かりいただけると思う。筆者は、社会主義末期、1989年11月の「ピ

ロード革命」前後にプラハ住宅団地で発行されていた機関紙を題材に、行政側が団地問題に関してどのような働きかけを行ったのか、革命の前後でどのような住民政策が引き継がれたのか、旧権力と市民政党の共通点と相違点がどのように浮かび上がるのかを分析した。「東アジア・コンファレンス」ということで、日本の団地との比較についても触れるつもりであったが、時間の関係と筆者のプレゼンのまずさで、ところどころはしょってしまい、質問にうまく答えられなかったことが残念であった。団地という経験は、日本では1960年代以降、韓国においても経済成長期の1980年代以降に見られたことで、日本と韓国、社会主義諸国をつなぐ20世紀の同時代的経験であるということを何とか伝えたかったのであるが、この点は今後の課題としたいと思う。



学内のカフェ

この大会は、基本的にはパネル報告であり、筆者は個人で申し込んだが、大会では「社会問題(政策)」というパネルとして組み込まれた。筆者のディスカッサントを務められた Kim Kyu-chin 氏は、ホスト校でチェコ語・スロヴァキア語の先生を務められている方で、「ユーラシア」の大海の中でチェコ語を解する方と出会えたのは大変うれしく思った。もっとも、今回の大会では社会史や東欧諸国に関する報告がほかになく、私と組んだもう一人のパネリストは「東アジアにおける人間の安全保障」というテーマ

であったので、(おそらく互いに) パネルとしては厳しいものとなった。やはり、ある程度地域やテーマにおいて共通するパネル報告者と組んで申し込むべきであった。日本やアジアの住宅を研究テーマとしている研究者を巻き込むことも必要だったかもしれない。

最後に蛇足を一点。筆者はこれが初ソウルであったが、韓国では近年、爆発的なカフェブームが巻き起こり、日本未上陸の内外チェーン系カフェが乱立している。コーヒー好きには気になる状況なので、韓国に行かれる機会のある方は是非お試しを。

◆ 学会カレンダー ◆

- 2014年10月4-5日 2014年度ロシア・東欧学会研究大会 於岡山大学津島北キャンパス
<http://www.gakkai.ac/roto/convention/>
- 10月18-19日 ロシア史研究会2014年度大会 於日本大学文理学部
http://www.gakkai.ac/russian_history/ 大会 /
- 10月24-26日 CESS(中央ユーラシア学会)年次大会 於コロンビア大学
<http://www.centraleurasia.org/2014-annual-meeting>
- 10月25日 比較経済体制学会2014年秋季大会「ウクライナ危機とロシア(仮)」 於西武文理大学 <http://www.jaces.info/info.html>
- 10月25日 内陸アジア史学会2014年度大会 於東京外国語大学
<http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/>
- 11月1-2日 日本ロシア文学会第64回定例総会・研究発表会 於山形大学小白川キャンパス
<http://yaar.jp.org/>

11月14-16日 日本国際政治学会 2014年度研究大会 於福岡国際会議場
<http://jair.or.jp/event/2014index.html>

11月20-23日 ASEES (スラブ東欧ユーラシア学会) 年次大会 於サンアントニオ
<http://www.aseees.org/convention>

2015年8月3-8日 ICCEES 第9回大会 於幕張 <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>

センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ 参謀本部作成樺太2万5千分の1地形図について ◆

スラブ・ユーラシア研究センター図書室は、最近、戦前から戦中にかけて参謀本部等が作成した南北樺太の2万5千分の1地形図の一部を入手することができましたので、お知らせします。

この地図は、おおまかに分類すると、次の3つのグループから成ります。

- ① 南樺太の北緯50度国境線付近の「二万五千分一地形図」。昭和17年(1942年)の空中写真測量によるので、右欄外には「軍事極秘応急図」および「本図ハ速ニ軍ニ供スル為図上整理未了ナルモ応急印刷ニ附シタルモノナリ」と注意書きが付されています。当時の日ソ国境線とその一列南側の大半に当たる(3枚欠)28枚のセットです。
- ② 「北樺太二万五千分一図」。右欄外に「軍事極秘」、左欄外には「昭和十五年測量(関東軍測量隊)同十六年製版(陸地測量部)」と記載されています。場所は、「バイカル湾近傍」2枚、「エホビ湾近傍」2枚、「オハ近傍」7枚、「ルイコフ近傍」4枚、「アノール近傍」6枚、「亜港近傍」3枚の全24枚。ただし、測量時の条件が不良のためか(敵国ではないにせよ、関係の微妙な外国領土に飛行機を飛ばして測量したのでしょうか)、図幅のそこかしこに大きな空白がみられます。
- ③ 「二万五千分一図オハ及バイカル近傍」。測量がおこなわれたのは北樺太の「保障占領」期である大正13年(1924年)で、薩哈唎州派遣軍司令部、陸地測量部、参謀本部の名で昭和元年(1926年)に発行されたものです。全部で8枚から成りますが、各図の表示から、もともと8枚のセットとして製作されたものと思われます。

戦前の日本が作成した樺太2万5千分の1地形図について、これまで北海道大学では現物を所蔵していませんでした。科学書院からは『樺太二万五千分の一地図集成』として2000年に復刻版が出ています。今回入手した地図をこの復刻版と照合したところ、①と②は、これにすべて収録済みですが、③については未収録のものであることがわかりました。

こうしたことから、今回入手した全60枚は、今後のサハリン・樺太史研究に役立つとともに、外邦図研究の空白を(若干とはいえ)埋めるものと期待されます。

なお、これとは別に、センター図書室は、国土交通省国土地理院よりご寄贈いただいた南千島の2万5千分の1地形図、計56枚を受入れましたことのお知らせします。これは、択捉島と色丹島の全体、および国後島の北部をカバーします。

同封いただいた文書によれば、同院は、2010年から2012年にかけての4回にわたって北方四島の全体をカバーする2万5千分の1地形図76枚を刊行し、ウェブサイト上では、当該の部分がすでにこの2月末から公開されているとのことです。[兎内]

編集室だより

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

第35号は校正作業が最終段階を迎え、近日中に刊行予定です。37号の締め切りは2015年7月15日です。どうぞ奮ってご投稿ください。以下は第35号の目次です。[野町]

Articles

- Gennadii Isaev Дискурс страсти в «Поэме поэм» Александра Кусикова
Zhanat Kundakbaeva Изобретение традиций: репрезентация Российской империи среди кочевников Северного Прикаспия в XVIII веке
Oleg Manaev Peculiarities of Belarusian Authoritarianism and Its Influence on the Regime Dynamics in Russia and Ukraine
Shigeki Ono Causality Relationship among Oil Price, Stock Index and Exchange Rate: Evidence from Russia
Bakhtiyor Islamov and Doniyor Islamov The Central Asian States 20 Years After: The “Puzzles” of Systemic Transformation

Featured Review

- Andrii Danylenko Between an Imagined Language and a Codified Dialect
Pugh, Stefan M., *The Rusyn Language: A Grammar of the Literary Standard of Slovakia with Reference to Lemko and Subcarpathian Rusyn* (Munich, 2009), viii, 224 pp. (Languages of the World/Materials, 476)

Book Reviews

- Svetlana Tolstaia *Popowska-Taborska H. Z różnych szuflad. Prace wybrane, relacje, wspomnienia.* Warszawa: Slawistyczny ośrodek wydawniczy, 2010. 390 pp.
Tomasz Kamusella Upper Silesian Questions
Jolanta Tambor, *Oberschlesien: Sprache und Identität* [Upper Silesia: Language and Identity] (Ser: westost-passagen, Slawistische Forschungen und Texte, Vol. 12). Hildesheim, Zurich and New York: Georg Olms Verlag. Translated from the Polish by Brigitte Schniggenfittig, 2011, 285 pp.

誰が何をどこで

2013年度(4～3月)の専任研究員・助教・客員教授・非常勤研究員の研究成果、研究余滴のアンケート調査(提出は任意)を以下のようにまとめました。[五十音順][大須賀]

- 家田修 ① 1 学術論文 ▼ From Monologue to Trialogue among Party, Academy, and Society: The Gabcikovo-Nagyymaros Dam Issue in Socialist Hungary in the 1980s (Osamu Ieda, ed., *Transboundary Symbiosis over the Danube: EU integration between Slovakia and Hungary from a local border perspective* [Slavic Eurasian Studies No. 27], 103-125, SRC, 2014) ▼ 福島、チェルノブイリ、アイカを地域とグローバルな視点から考える『地域研究』14(1)62-83 (2014) ① 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 突発的な大規模環境汚染事故への国境を超えた社会防災的対応: ハンガリー赤泥流出事故のフィールド調査を基にした防災社会システムモデル構築『村田学術振興財団年報』27:634-642 (2013) (4) 翻訳 ▼ (監訳) オルガ I. ティムチェンコ著『電離放射線と健康: いま誰もが知っておくべきこと』[スラブ・ユーラシア研究報告集 別冊] 100 (スラブ研究センター, 2013) ▼ (渡邊昭子他と共訳) ニーデルハウゼン著『総覧 東欧ロシア史学史』712 (北海道大学出版会, 2013) ① 3 著書 ▼ (編著) *Transboundary Symbiosis over the Danube: EU integration between Slovakia and Hungary from a local border perspective* [Slavic Eurasian Studies No. 27], 135 (SRC, 2014) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ Mélységi védelem Defence in Depth, Eotvos Lorand University (2013.3.26 前回掲載漏れ) ▼ From Monologue to Trialogue among

Party, Academy, and Society: Gabcikovo-Nagymaros Dam Issue in the Socialist Hungary in the 1980s, 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 大阪経済法科大学 (2013.8.10) ▼ A japán magyarsággutatók eredményei, Ballasi Institute, Budapest (2013.8.26) ▼ アイカ赤泥流出事故, ハンガリー学会, 大阪大学 (2013.12.8)

岩下明裕 ㊦ 1 学術論文 ▼ 「序章 ユーラシア国際関係とは何か」; 「終章 ユーラシア国際関係解題」; (田畑伸一郎と共著) 「補論 ユーラシアの新しい『三角形』を求めて」(岩下明裕編著『ユーラシア国際秩序の再編』[シリーズ・ユーラシア地域大国論 3] 1-12, 187-202, 203-217, ミネルヴァ書房, 2013) ㊦ 3 著書 ▼ 『北方領土・竹島・尖閣、これが解決策』253 (朝日新書, 2013) ▼ (編著) 『ユーラシア国際秩序の再編』[シリーズ・ユーラシア地域大国論 3] 240 (ミネルヴァ書房, 2013) ▼ (木山克彦と共編著) 『図説 ユーラシアと日本の国境: ボーダー・ミュージアム』111 (北海道大学出版会, 2014) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 境界研究の最前線: 北方領土・尖閣・竹島, 合同ワークショップ「地域情報学と境界研究が出会うとき: 国境問題・宗教・環境」, 京都大学 (2013.9.29)

岩本和久 ㊦ 1 学術論文 ▼ Остров Тюлений и остров Атласова в рассказах Дзюрана Хисао (Е.А. Иконникова, А.А. Степаненко (ред.) *Сахалин и курильские острова в литературе и периодической печати*, 55-58, Южно-Сахалинск: Издательство СахГУ, 2013) ▼ 二〇〇〇年代のロシア文学に描かれたチェチェン紛争: マカーニン『アサン』とサドゥラエフ『シャリ急襲』を中心に (中村唯史編『ロシアの南 近代ロシア文化におけるヴォルガ下流域、ウクライナ、クリミア、コーカサス表象の研究』[山形大学人文学草書 5] 205-221, 2014) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 世界文学史におけるチェーホフの大きさを確認する『図書新聞』3111(2013.5.25):5 ▼ 中世への回帰? (海外文学・文化 2013 回顧)『図書新聞』3139(2013.12.21):5

宇山智彦 ㊦ 1 学術論文 ▼ The Changing Religious Orientation of Qazaq Intellectuals in the Tsarist Period: *Shari'a*, Secularism, and Ethics (Niccolò Pianciola and Paolo Sartori, eds., *Islam, Society and States across the Qazaq Steppe (18th - Early 20th Centuries)*, 95-118, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2013) ㊦ 3 著書 ▼ (編著) 『比較研究の愉しみ: 国立大学附置研究所・センター長会議第3部会シンポジウム報告』[スラブ・ユーラシア研究報告集 別冊] 58 (スラブ研究センター, 2014) ㊦ 4 その他業績 (事典項目) 「アイトマートフ」; 「アイニー」; 「アカエフ」; 「アバイ・クナンバーエフ」など 43 項目 (岩波書店辞典編集部編『岩波 世界人名大辞典』岩波書店, 2013) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 権威主義体制論の新展開: 旧ソ連地域研究からの貢献, 2013 年度日本比較政治学会研究大会, 神戸大学 (2013.6.23) ▼ Repression of Kazakh Intellectuals as a Sign of Weakness of Russian Imperial Rule: The Paradoxical Role of Governor A. N. Troinitinskii in the Kazakh National Movement, Biennial Conference of the European Society for Central Asian Studies (ESCAS), Astana (2013.8.6)

ディビッド・ウルフ ㊦ 1 学術論文 ▼ (泉川泰博訳) 第1章 スターリン外交と中露印三角形 (岩下明裕編著『ユーラシア国際秩序の再編』[シリーズ・ユーラシア地域大国論 3] 15-39, ミネルヴァ書房, 2013) ▼ Stalin-Sun [Song Ziwen], *Iiun'-Avgust 1945, Russkii Sbornik*, 16:363-374 (2014)

大野成樹 ㊦ 1 学術論文 ▼ The Effects of Foreign Exchange and Monetary Policies in Russia, *Economic Systems*, 37(4):522-541 (2013) ▼ ロシアにおける金融政策手段および政策運営『旭川大学経済学部紀要』72:73-94 (2013) ▼ ロシアにおける金融政策の指標と変遷『ロシア NIS 経済調査月報』58(11):52-60 (2013) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ (講演会) 世界経済の動きを読み解く, 旭川市シニア大学 (2013.6.7) ▼ (講演会) 世界経済の動きを読み解く, 2013 旭川大学 AEL 経済経営講座, 旭川商工会議所 (2013.9.6) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ The Effects of Foreign Exchange and Monetary Policies in Russia, 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 大阪経済法科大学 (2013.8.9)

貝澤哉 ㊦ 1 学術論文 ▼ 擬態への不可能な欲望: ウラジーミル・ナポコフ『絶望』についてのノート『早稲田現代文芸研究』4:18-34 (2014) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 『真昼の視線』李承雨 (著)、金順姫 (訳) / 岩波書店 / 2013 (野間秀樹編『韓国・朝鮮の知を読む』458-460, 株式会社クオン, 2014) (4) 翻訳 ▼ (高柳聡子と共訳) タチャーナ・トルスタヤ著「クィシ」(連載第二回)『早稲田文学』6:331-366 (2013); (連載第三回)『早稲田文学』7:263-274 (2014) ▼ ウラジーミル・ナポコフ著『絶望』389 (光文社古典新訳文庫, 2013) ㊦ 3 著書 ▼ (ボリス・ラーニンと共著) 『二世紀ロシア小説はどこへ行く: 最新ロシア文学案内』63 (東洋書店, 2013) ㊦ 4 その他業績 (著書形式) ▼ (テレビ講座テキスト)『NHK テレビ テレビでロシア語』2013年5~12月号, 2014年1~4・5月号 (NHK 出版) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ ユーリイ・ティニャーノフの詩的言語論: 身体不在とその構築, シンポジウム『文学理論を身体化する』[日本比較文学第51回東京大会], 早稲田大学文学学術院 (2013.10.20) ▼ Формалисты отказываются от формы и хотят ее разрушить: вокруг

формалистского понятия «остранение», ソフィア・シンポジウム「ロシア・アヴァンギャルド芸術 100 年」РУССКИЙ АВАНГАРД, 上智大学 (2013.10.31)

辛嶋博善 ㊦ 1 学術論文 ▼ Transformation of Residential Unit and Sustaining Pastoral Society in Modern Mongolia (The Korean Association for Mongolian Studies, ed., *The Origin and History of Mongol Tribe* [The 34th International Conference], 152-161, 2014) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ 高倉浩樹著『極北の牧民サハ: 進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』(昭和堂, 2012 年)『文化人類学』78(2):287-290 (2013) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Transformation of Residential Unit and Sustaining Pastoral Society in Modern Mongolia, The 34th International Conference on "The Origin and History of Mongol Tribe," The Korean Association for Mongolian Studies, Seoul (2014.3.28-29)

木山克彦 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ (宇佐見祥子と共著) グローバル COE 展示, 4 年間の活動を終えて『北海道大学総合博物館ニュース』28:5 (2013) ▼ (正司哲朗、千田嘉博、白杵勲、佐川正敏、A. エンフトルと共著)「モンゴル国における遺跡デジタルアーカイブ」;(千田嘉博、正司哲朗、坂本俊、A. エンフトル、白杵勲、佐川正敏と共著)「モンゴル国チントルゴイ遺跡の瓦磚類の調査」;「ポリツェ文化～靺鞨初期の土器資料調査」(北アジア遺跡調査報告会実行委員会編『第 15 回北アジア調査研究報告会』45-48, 53-56, 73-76, 札幌学院大学, 2014) ▼ 東アジア史から見たオホーツク文化と大陸との関係, 環日本海から見た人類史と文化, 朝日カルチャーセンター, 札幌 (2013.7.10) ▼ 契丹の北西辺防: 鎮州城址の調査, GCOE プログラム『《境界研究の拠点形成》の歩み」展関連研究員セミナー, 北海道大学総合博物館 (2013.12.21) ㊦ 3 著書 ▼ (岩下明裕と共編著)『図説 ユーラシアと日本の国境: ボーダー・ミュージアム』111 (北海道大学出版会, 2014) ▼ (白杵勲と共編著『ロシア沿海地方の初期金属器時代』74 (札幌学院大学, 2014) ㊦ 4 その他業績 (著書形式) ▼ (Ч. Амаргүвшин, Т. Сагада, Г. Эрэгзэн, Л. Ишцэрэн と共編著) *Төв Аймгийн Мөнхөмюрт Сумын Нутаг Зүүн Байдалгийн Гол*, 64 (Mongolian Academy of Sciences Institute of Archaeology, 2013) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ (白杵勲、千田嘉博、正司哲朗、佐川正敏、A. Enkhtur と) 関于契丹 (遼) 州城城門的結構, 十至十二世紀東亞都城和帝陵考古興遼文化国際学術検討会, 内蒙古赤峰市, 中国 (2013.8.22)

久保慶一 ㊦ 1 学術論文 ▼ 平和政策の比較政治学: 計量分析と数理モデルによる政策効果の研究 (伊東孝之監修・広瀬佳一、湯浅剛編『平和構築へのアプローチ: ユーラシア紛争研究の最前線』49-66, 吉田書店, 2013) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 特集にあたって『アジア経済』54(4):2-10 (2013) ㊦ 4 その他業績 (著書形式) ▼ 東欧 (『現代用語の基礎知識 2014 年版』353-360, 自由国民社, 2013) ▼ (項目の一部) 柴宜弘、石田信一編著『クローチアを知るための 60 章』368 (明石書店, 2013) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ The Role of the Military and Security Forces in the Transition Period: The Case of Yugoslavia, Association for the Study of Nationalities (ASN), 18th Annual World Convention, New York (2013.4.18) ▼ (Yohei Narita, Ryo Nakai と) Party Leader Elections in East Asia: Comparative Analysis of Japan and Taiwan, European Consortium for Political Research (ECPR), 7th General Conference, Bordeaux, France (2013.9.5)

越野剛 ㊦ 1 学術論文 ▼ 第 6 章 幻想と鏡像: 現代ロシア文学における中国のイメージ (望月哲男編著『ユーラシア地域大国の文化表象』[シリーズ・ユーラシア地域大国論 6] 154-173, ミネルヴァ書房, 2014) ▼ 「社会主義圏の戦争の記憶を比較する」;「ハティン虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶」『地域研究』14(2):8-16, 75-91 (2014) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 事故前のチェルノブイリ (東浩紀編著『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド 思想地図 β vol. 4-1』62, ゲンロン, 2013) ▼ ナボコフと蝶 (岩下明裕、木山克彦編著『図説ユーラシアと日本の国境: ボーダー・ミュージアム』72-73, 北海道大学出版会, 2014) (3) 書評 ▼ 亀山郁夫著『謎解き悪霊』(新潮選書, 2012 年)『ロシア語ロシア文学研究』45:160-165 (2013) (5) その他 ▼ 風土と国のイメージ: 冬将軍とロシア, 北海道大学 5 研究所・センター合同一般公開 (2013.6.8) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Cultural Representation of the Khatyn Massacre in Belarus, 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 大阪経済法科大学 (2013.8.9) ▼ Мемориализация как модернизация: Алевс Адамович и Вторая мировая война в белорусской литературе, SRC/IREES ジョイントシンポジウム Modern as the Past: Russian Modernism Viewed from the 21st Century, ソウル国立大学 (2013.12.21)

後藤正憲 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 回顧と展望: 現代 ロシア・東欧・北欧『史学雑誌』122(5):375-380 (2013) ▼ 言語の逆説を生きた詩人: ゲンナジー・アイギ (岩下明裕、木山克彦編著『図説ユーラシアと日本の国境: ボーダー・ミュージアム』70-72, 北海道大学出版会, 2014)

高橋沙奈美 ㊦ 1 学術論文 ▼ソヴィエト・ロシアにおける史跡・文化財保護運動の展開：情熱家から「社会団体」VOOPIKに至るまで『スラヴ研究』60:57-90 (2013) ▼Особенности проявлений религиозности в период позднего социализма (на материалах Владимирской области) (Е.И. Аринин (ред.) *Религия и религиозность во Владимирском регионе*. Т. 2: 51-85, Владимир, 2013) ▼ Russian Speakers in Latgale and “the Socialist Rituals” under Socialism, *Vesture: avoti un cilveki* [Daugavpils Universitātes Akadēmiskais apgāds “Saulē”, XVII:443-447 (2014) ▼ (前島訓子、小林宏至と共著) 第3章 地域大国の世界遺産：宗教と文化をめぐるポリティクス・記憶・表象 (望月哲男編著『ユーラシア地域大国の文化表象』[シリーズ・ユーラシア地域大国論6] 75-101, ミネルヴァ書房, 2014) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼Pussy Riotの「祈り」は冒瀆か? :ロシア正教会の現状とそれに対する批判の声『国際宗教研究所ニュースレター』76:12-3 (2013) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Religious Practices in Latgale (Eastern Latvia) during the Soviet Era: Catholicism, the Old Believers, and “the Socialist New Rituals,” BASEES/ ICCEES, European Congress 2013: “Europe: Crisis and Renewal,” Cambridge, UK (2013.4.5-8) ▼ (招待講演) ロシア：近くて遠い隣国の歴史と文化, 筑波大学国際部講演会「ユーラシア世界と日本」第4回 (2013.5) ▼学術と政治の狭間で:ソヴィエト・ロシアにおける宗教・無神論研究の発展,「宗教と社会」学会第21回学術大会, 皇學館大学 (2013.6)

田畑伸一郎 ㊦ 1 学術論文 ▼低速モードに入ったロシア経済：2012年マクロ実績の分析『ロシアNIS調査月報』58(5):1-20 (2013) ▼ (岩下明裕と共著) 補論：ユーラシアの新しい「三角形」を求めて (岩下明裕編著『ユーラシア国際秩序の再編』[シリーズ・ユーラシア地域大国論3] 203-217, ミネルヴァ書房, 2013) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ロシア経済とインフレーション『学士会報』902:32-36 (2013) ▼ Will the Boom in Japan-Russia Economic Relations Continue? *Baltic Rim Economies* [Pan-European Institute, University of Turku], 7:47 (2013) ▼ロシアと中国とインドの経済を比較したら何が分かったか? (宇山智彦編『比較研究の愉しみ：国立大学附置研究所・センター長会議第3部会シンポジウム報告』[スラブ・ユーラシア研究報告集 別冊] 41-47, スラブ研究センター, 2014) (5) その他 ▼ヘルシンキにおける「ロシア近代化」ワークショップ参加記『スラブ研究センターニュース』135:14-16 (2013) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ The Analysis of Japan-Russia Economic Relations in the 2000s, Joint Conference by the Association for Comparative Economic Studies (ACES), the Japanese Association for Comparative Economic Studies (JACES), the Society for the Study of Emerging Markets (SSEM) and the World Class University Project of the Department of Economics, Seoul National University on “The Pacific Rim Economies: Institutions, Transition and Development,” Seoul (2013.4.26)

▼日ロ経済関係の進展：双方の比較優位に基づく発展, 第6回北東アジア地域協力発展国際フォーラム, ハルビン (2013.6.15) ▼ Comparative Analysis on the State Budget of the Russian Empire, USSR and Contemporary Russia, International Workshop on “Modernities Scrutinized: Finland, Japan and Russia in Comparison,” Aleksanteri Institute, University of Helsinki (2013.9.12) ▼ロシアと中国とインドの経済を比較したら何が分かったか?, 国立大学附置研究所・センター長会議第3部会シンポジウム「比較研究の愉しみ」, 北海道大学 (2013.10.4) ▼ Why Does Inflation Continue in Russia?, 45th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies, Boston MA (2013.11.23)

宍内勇津流 ㊦ 1 学術論文 ▼モスクワ府主教プラトン・レフシン『ロシア教会史』(1805年)の動乱(スムータ)時代叙述に見る歴史観について (中近世ロシア研究会編『中近世ロシア研究論文集』118-138, 2014) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (4) 翻訳 ▼ヴラジーミル・シシキン著「軍事独裁への途上のコルチャーク提督 1918年9月19日～同年11月18日」『環オホーツクの環境と歴史』3:69-101 (2013) (5) その他 ▼スラブ研究センターが所蔵する北樺太関係画像資料：どのように読み解くか, 合同ワークショップ「非文字資料研究の理論構築に向けての事例検討1」, 北海道大学 (2013.6.30) ▼アレクサンドル一世期ロシアの宗教政策とフィラレート (ドロズドフ), 日本ロシア文学会北海道支部研究発表会, 札幌大学 (2013.7.13) ▼フィラレート (ドロズドフ) とツァーリたち, 「プラトンとロシア」研究会, 北海道大学 (2013.9.11) ㊦ 3 著書 ▼ (共編)『環オホーツクの環境と歴史3』101 (サッポロ堂書店, 2014)

㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼多文化共生における図書館の役割, 国際シンポジウム「北海道における多文化共生：その理念と実践」, 北海道大学 (2014.3.1)

長縄宣博 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼協力者か攪乱者か? ロシア帝国のタートル人『史学雑誌』123(1):117-118 (2014) ▼ Я побывал на родине Карима Хакимова, *Светлый путь* [газета Бижбулякского района Республики Башкортостан], 20(9592):120 (2014) ㊦ 3 著書 ▼ (So Yamane と共編) *Regional Routes, Regional Roots? Cross-Border Pattern of Human Mobility in Eurasia* [比較地域大国論集14] 111 (スラブ研究センター) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼メッカへの道：イスラーム大国ロシア, 2013年度公開講座「ユーラシアの現代と宗教」(2013.5.13) ▼ The Red Sea Becoming Red?

The Bolsheviks' Commercial Enterprise in the Hijaz and Yemen, 1924-1938, 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 大阪経済法科大学 (2013.8.10) ▼メッカ巡礼とローカルな政治：タタルスタンとダゲスタンの事例から、合同ワークショップ「地域情報学と境界研究が合うとき：国境問題・宗教・環境」, 京都大学 (2013.9.29) ▼民族の保育器としての帝国：ソ連はなぜ「平和」に解体したか, 中国社会科学院世界史研究所 (2013.12.3) ▼Имперское наследие взаимодействия с мусульманским миром: из сравнительного анализа царской России и СССР, 中国人民大学 (2013.12.5) ▼帝国統治の煉瓦工からムスリム共同体の代弁者へ：ロシア帝国のタタール人の場合, 「比較植民地史」 科研第2回研究会, スラブ研究センター (2014.1.25) ▼ロシアのヴォルガ・ウラル地域におけるイスラーム教育ネットワークの形成と変容, 京都大学 CIAS 共同研究「移動と宗教実践」, 京都大学 (2014.2.1) ▼帝国主義のなかのイスラームとネイション：ロシア帝国、オスマン帝国、英領インドの人間の移動の軌跡から, 比較地域体系研究会, 明治大学 (2014.3.2) ▼イスラームのロシア：調和と暴力の複雑な関係, スラブ研究センター第8回公開講演会 (2014.3.14)

長與進 ① 1 学術論文 ▼ A Reflection of the Names of a City in the Bourderlands: Pressburg/Pozsony/Prešporok/Bratislava (I) (Osamu Ieda, ed., *Transboundary Symbiosis over the Danube: EU integration between Slovakia and Hungary from a local border perspective* [Slavic Eurasian Studies No. 27], 1-16, SRC, 2014) ① 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼私が留学した街：トポニミカルな随想『東欧史研究』36:81-84 (2014)

野部公一 ① 1 学術論文 ▼ロシアの畜産：動向と現状『専修経済学論集』48(3):175-191 (2014) ① 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼徳永昌弘著『20世紀ロシアの開発と環境：「パイカル問題」の政治経済学的分析』(北海道大学出版会, 2013年)『歴史と経済』222:71-72 (2014) ① 4 その他業績 (著書形式) ▼『旧ソ連中央アジア長期農業統計：1920年代末からの動向分析』[RRC Working Papers No. 38] 94 (一橋大学経済研究所, 2013)

野町素己 ① 1 学術論文 ▼ On the Kashubian Past Tense Form *jô bêt 'I was'* from a Language Contact Perspective (Elżbieta Kaczmarska and Motoki Nomachi, eds., *Slavic and German in Contact: Studies from Areal and Contrastive Linguistics* [Slavic Eurasian Studies No. 26], 27-57, SRC, 2014) ① 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼境界の言葉を作り、そして詠う：ウンドラ・ウィソホルスキ (岩下明裕、木山克彦編著『図説ユーラシアと日本の国境：ボーダー・ミュージアム』67-69, 北海道大学出版会, 2014) ① 3 著書 ▼ (Elżbieta Kaczmarska と共編著) *Slavic and German in Contact: Studies from Areal and Contrastive Linguistics* [Slavic Eurasian Studies No. 26], 165 (SRC, 2014) ▼ (Tomasz Kamusella と共編著) *The Multilingual Society Vojvodina: Intersecting Borders, Cultures and Identities* [スラブ・ユーラシア研究報告集 6] 121 (スラブ研究センター, 2014) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ "Don't be quiet, Poet!" But in What Language?: The Creation of Lachian Literary Language by Ondra Lysohorsky and Its Implication for Today, SRC/IREEES ジョイントシンポジウム Modern as the Past: Russian Modernism Viewed from the 21st Century, ソウル国立大学 (2013.12.21) ▼ Possessive Constructions in Serbian: Some Implications for Areal Typology, SRC/ベオグラード大 ジョイントワークショップ The Serbian Language as Viewed by the East and the West: Synchrony, Diachrony and Typology, SRC (2014.2.5)

本田晃子 ① 1 学術論文 ▼映画は建築する：『輝ける道』に見る社会主義リアリズムの象徴空間『ロシア語ロシア文学研究』45:182-204 (2013) ① 3 著書 ▼ (単著)『天体建築論：レオニドフとソ連邦の紙上建築時代』343 (東京大学出版会, 2014) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ Architecture in the Media: Ivan Leonidov's Virtual City in the Architectural Journal SA, 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 大阪経済法科大学 (2013.8.10) ▼動く都市／静止する都市：アレクサンドル・メドヴェトキンの『新モスクワ』, 日本ロシア文学会第63回大会, 東京大学 (2013.11.2) ▼地下鉄的想像力：ソヴィエト・ロシア映画における地下鉄空間イメージの変遷, 表象文化論学会第8回研究発表集会, 東京大学 (2013.11.9)

松里公孝 (センター内で出版したもののみ掲載) ① 1 学術論文 ▼ (Tahara Fumiki と共著) Russia's Local Reform of 2003 from a Historical Perspective: A Comparison with China, *Acta Slavica Iaponica*, 34:115-139 ▼ロシア正教会と中国：北京宣教団設立300周年に寄せて『境界研究』特別号:55-68 (2014)

望月哲男 ① 1 学術論文 ▼「序章 ロシア・中国・インド：比較の意味とその背景」；「第9章 帝国の暴力と身体：トルストイとガンディーのアジア」；「終章 ユーラシア諸国の自己表象：ロシア・中国・インドの比較から」(望月哲男編著『ユーラシア地域大国の文化表象』[シリーズ・ユーラシア地域大国論 6] 1-19, 224-249, 251-266, ミネルヴァ書房, 2014) ▼境界を越える写真『境界研究』特別号:1-17 (2014) ▼ Ненасилие как антимодернизм. Ганди об учении Толстого на фоне Русско-японской войны 1905 г. (Корнелия Ичин и др., ред., *Ex oriente lux: Japanese culture and we*, 27-40, Belgrade, 2014) ▼ロシア水辺

文人調査旅行と南方表象（中村唯史編『ロシアの南 近代ロシア文化におけるヴォルガ下流域、ウクライナ、クリミア、コーカサス表象の研究』[山形大学人文学叢書5] 23-67, 2014） ㊦2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等 ▼感情の目覚め、物語の魔力（『熱帯のアンナ』『文学座通信』648:2-3 (2013) ▼（学会抄録）4 学会合同大会・共同シンポジウム『ロシア語ロシア文学研究』45:285-287 (2013)（3）書評 ▼アレクサンドル・ポチョムキン著（コックリル浩子訳）『私（ヤー）』（群像社, 2013 年）『週刊読書人』2014.1.17:5 ▼中村喜和著『ロシアの空の下』（風行社, 2014 年）を読んで『風の便り』51:1-4 (2014)（4）翻訳 ▼ウラジーミル・ソローキン著「サハリン - 1」『文学界』2014 年 2 月号 :152-155 ▼イワン・ブーニン著「世の果てへ」; 「村」(『ブーニン作品集 1』11-19, 63-252, 群像社, 2014)（5）その他 ▼（エッセイ）第 5 章 揺れる境界：文学が見つめるもの（序文）（岩下明裕、木山克彦編著『図説ユーラシアと日本の国境：ボーダー・ミュージアム』63, 北海道大学出版会, 2014） ㊦3 著書 ▼（編著）『ユーラシア地域大国の文化表象』[シリーズ・ユーラシア地域大国論 6] 274（ミネルヴァ書房, 2014） ㊦5 学会報告・学術講演 ▼Тени иезуитов в романе Достоевского, XV Symposium of the International Dostoevsky Society, Moscow (2013.7.9) ▼Сравнивая несравнимые: из опыта сравнительного исследования культур Евразийских стран, 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 大阪経済法科大学 (2013.8.9-10) ▼Сравнивая несравнимые: из опыта сравнительного исследования культур Евразийских стран, V Международная научно-практическая конференция: Русский язык и русская литература в диалоге стран АТР, ДВФУ, Владивосток (2013.10.8-10) ▼Новый подход к модернизму? По поводу современного дискурса о формализме, SRC/IREEES ジョイントシンポジウム Modern as the Past: Russian Modernism Viewed from the 21st Century, ソウル国立大学 (2013.12.21)

会 議 (2014 年 7 月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2014 年度第 1 回 7 月 6 日（日）

議題

1. 共同利用・共同研究拠点の活動について
 - a. 2013 年度活動報告 プロジェクト型公募共同研究・共同利用型個人研究
 - b. 2014 年度活動状況 プロジェクト型公募共同研究・共同利用型個人研究
2. 共同利用・共同研究公募のあり方について
3. 第 3 期中期目標・中期計画期間における共同利用・共同研究拠点のあり方について
4. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について
5. その他

◆ センター協議委員会 ◆

2014 年度第 1 回 7 月 2 日（水）

議題

1. 2013 年度支出予算決算について
2. 2014 年度支出予算配当（案）について
3. 教員の人事について
4. その他

[事務係]

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 137 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[家田／大須賀]

- 5月16日 高山陽子（亜細亜大）
5月19日 今井昭夫（東京外国語大）
5月23日 上田洋子（榊原大）
5月26日 鳥山祐介（千葉大）
5月27日 Bíró, László、Kitanics, Máté、Pap, Norbert（ペーチ大、ハンガリー）、Reményi, Péter（同）、Sokcsevits, Dénes（同）
5月31日 中村知子（茨城キリスト教大）
6月18日 Cyryl Kozaczewski（駐日ポーランド大使）
6月21日 湊源道（ルーツ・オブ・ジャパン代表）
6月23日 伊東孝之（早稲田大名誉教授）
6月29日 日臺健雄（埼玉学園大）
7月1日 長沼秀幸（東京大・院）
7月6日 内田健介（早稲田大）、鳥山祐介（千葉大）
7月7日 Vasily Bogoiavlenskii（ロシア科学アカデミー）、Vladimir Pavlenko（同）、Alexander Georgiadi（同）
7月10-11日 Ozan Arslan（イズミル経済大、トルコ）、Gulzat Egemberdieva、Aftandil Erkinov（東京外国語大）、Matteo Fumagalli（中央ヨーロッパ大、ハンガリー）、Mark von Hagen（アリゾナ州立大、米国）、Kim, Yongmi、Dominic Martin（中央大）、Viren Murthy（ウィスコンシン・マディソン大、米国）、Niccolò Pianciola（嶺南大学、香港）、Viktor Shmagin（カリフォルニア大、米国）、Deborah Steinhoff、足立芳宏（京都大）、生田美智子（大阪大名誉教授）、池田嘉郎（東京大）、伊東孝之（早稲田大名誉教授）、植田暁（東京大）、小野容照（京都大）、河西晃祐（東北学院大）、小松久男（東京外国語大）、佐原（野坂）潤子（ビルゲント大、トルコ）、佐原徹哉（明治大）、塩川伸明（東京大名誉教授）、豊川浩一（明治大）、難波ちづる（慶應義塾大）、長谷川毅（カリフォルニア大、米国）、浜由樹子（津田塾大）、林忠行（京都女子大）、藤原文（アルバータ大、カナダ）、藤原克美（大阪大）、水谷智（同志社大）、村田奈々子（一橋大）、湯浅剛（防衛研究所）
7月13-14日 Christopher Baker（フリー研究者）、Choosit Choochat（チェンマイラチャパット大、タイ）、Lae Dilokvidhyarat（チュラーロンコーン大、タイ）、Plubplung Kongchana（シーナカリンウィロート大、タイ）、Chatthip Natsupha（チュラーロンコーン大、タイ）、Pasuk Phongpaichit（同）、Pornsan Watanangura（同）、伊藤延由（飯館村いいたてファーム）、岩本由輝（東北学院大名誉教授）、鈴木健夫（早稲田大名誉教授）、肥前栄一（東京大名誉教授）
7月14日 金沢友緒（東京大・院）
7月19日 Srabani Roy Choudhury（ジャワハルラー・ネルー大、インド）、石上悦朗（福岡大）、絵所秀紀（法政大）
7月26日 今井宏平（日本学術振興会）、粕谷元（日本大）、久保庭真彰（一橋大）、中村靖（横浜国立大）、八尾師誠（東京外国語大）、湯浅剛（防衛研究所）
7月29日 亀田真澄（東京大）、三谷恵子（同）
7月30日 Umut Korkut（グラスゴー・カレドニアン大、英国）、長興進（早稲田大）
7月31日 野田岳人（群馬大）
8月4日 Lee, Moonyoung（ソウル大）、大谷崇（早稲田大・院）
8月5日 原貴美恵（ウォータールー大、カナダ）
8月7日 福田宏（京都大）

◆ 研究員消息 ◆

野町素己研究員は2014年4月24日～5月3日の間、科学研究費研究における19th Balkan and South Slavic Conference 出席・発表・意見交換及びMichael Finke教授との研究打合せ及び資料収集のため、米国に出張。また5月10～21の間、科学研究費研究における研究打ち合わせ及び国際会議「スラヴ諸方言の文法および語彙構造におけるドイツ語の影響」出席・発表及び聞き取り調査のため、ポーランドに出張。

田畑伸一郎研究員は5月13～19の間、第3回環太平洋会議における研究成果の発表と研究打合せのため、米国に出張。また5月27日～6月2日の間、UArctic Rectors' Forum への参加のため、アイスランドに出張。

家田修研究員は5月19～25日の間、国際放射線生態環境学会での報告のため、ハンガリーに出張。

岩下明裕研究員は6月5～16日の間、科学研究費研究他におけるABS First World Conference 2014出席・報告及びABS学会について打合せのため、フィンランド、ロシアに出張。

長縄宣博研究員は6月14日～7月6日の間、科学研究費研究における資料収集及び国際会議“Eastern and Central European Empires, Nations, and Societies on the Verge of World War I”出席・発表・研究打合せ及び“Anglo-American Conference of Historians”出席・発表のため、ポーランド、英国に出張。

宇山智彦研究員は6月26～29日の間、科学研究費研究における学会報告（The 6th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies 2014）のため、韓国に出張。

望月哲男研究員は6月26～30日の間、The 6th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies 2014 出席・研究報告・研究打合せのため、韓国に出張。



ソウルの市場で見つけたユーラシア 上部の看板に注目
(10 ページからの森下氏のエッセイ参照)

目 次

研究の最前線.....	1
2014 年度夏期国際シンポジウム「危機の 30 年」開催される／2014 年度科学研究費プロジェクト／北大祭期間中のセンター 一般公開に 315 名来場／2014 年度鈴木・中村基金奨励研究員決まる／ソウル大学キム教授の滞在／ブリヤート大学ポトーエフ准教授の滞在／研究会活動	
特別セミナー「ユーラシア地域大国の経済発展：ロシア研究者とインド研究者の対話」を開催して by 佐藤隆広.....	7
学界短信.....	10
第 6 回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスに参加して by 森下嘉之／学会カレンダー	
図書室だより.....	13
参謀本部作成樺太 2 万 5 千分の 1 地形図について	
編集室だより.....	14
<i>Acta Slavica Iaponica</i>	
誰が何をどこで.....	14
会議.....	19
センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター協議委員会	
みせらねあ.....	20
人物往来／研究員消息	

2014 年 8 月 29 日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	家田修
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
